

巻頭言

機器分析評価センター
センター長 山口 佳隆

令和5年4月より、前センター長の栗原先生よりセンター長を引き継ぐことになりました山口です。ご挨拶が遅くなりましたが、この場をお借りして少し自己紹介をさせていただきます。

今から遡ること30数年前、学部4年生の卒業研究で錯体化学研究室に配属されて以来、金属錯体に関する研究を中心に教育・研究に従事してきました。Wernerの配位説に端を発する錯体化学は、その後、フェロセンやチーグラール・ナツタ触媒の発見を機に有機金属化学へと発展しました。錯体化学・有機金属化学は、元素周期表の大部分を占める遷移金属元素を対象とし、典型元素からなる配位子との組み合わせにより新たな均一系分子触媒や機能性材料へと展開されています。金属錯体は、実は私たちにとって身近なものですが、遷移金属元素を扱うことから食わず嫌いの方も少なからずいることは否めません。

化学は、改めて言うまでもございませんが、物質を対象とする学問であり、物質を作り出すことができることが最大の強みです。その合成した物質を同定するためには機器分析装置での測定が必要不可欠です。これまで、当たり前装置が使えることに何の疑問も持たず、一利用者としてセンターの装置を利用してきましたが、昨年4月からはセンターの一員として、すなわち内側からセンターを見る機会を与えていただくことになりました。当初、センターの運営に参画することに一抹の不安を覚えました。杞憂に過ぎませんでした。これは、前センター長の栗原先生のもと、専任教員である谷村先生を中心とした全てのスタッフの協働体制が確立されていたからにほかなりません。さらに、協力教員の先生方、研究推進機構の職員の方々の献身的な協力体制のもと効率的なセンターの運営がなされていると改めて実感しています。関係各位の皆様に改めて御礼申し上げます。

最後に、センターを維持・管理し発展させていくためにはセンター関係者だけで実現できるものではございません。利用者である本学教員・学生の皆様のご理解とご協力が必要不可欠です。そして、センターは本学における教育の充実と研究の発展に重要な責務を負っていると考えています。もとより微力ではございますが、センター運営のために尽力する所存でございます。どうぞ今後ともご指導・ご支援くださいますよう心よりお願い申し上げます。